LOVE

矢崎　節夫

やざき・せつお

1947年、東京生まれ。早稲田大学英文科在学中より、詩人まどみちお氏らに師事し『チャイルドブック』、『キンダーブック』などに作品を発表。童話集『ほしとそらのしたで』で第12回赤い鳥文学賞を、『金子みすゞ全集』で第8回日本児童文学学会特別賞を受賞。著書に『二十七ばん目のはこ』、『ひとりでもふたり』など多数。

金子みすゞの世界

（JULA出版局提供）

“みすゞさん”と今、やさしい響きで呼ばれている童謡詩人がいます。

金子みすゞがその人です。

実は金子みすゞに直接出会えた人は、もう数名しかいないのです。それなのに、今でも生きているように、一番大切な人を呼ぶように、“みすゞ”さんと多くの人が呼んでいるのです。それは、もうだれもがやさしくなりたくなっているからでしょう。そして、みすゞの作品を読むと、だれのこころも、明るい方へ、うれしい方へ、やさしい方へとコトコトと動き始めるからでしょう。

“幻の童謡詩人”

金子みすゞは、今から70年ほど前の大正から昭和にかけての日本の童謡の隆盛期に、彗星のように現われ、詩人の西條八十に「若き童謡詩人中の巨星」といわれ、日本中の文学少年少女のあこがれの星でしたが、昭和5年3月10日、26才の若さで愛児を一人残し、この世を去りました。

以後、多くのみすゞ捜しにもかかわらず、長い間隠れたまま“幻の童謡詩人”といわれてきました。

私が金子みすゞとその作品を初めて知ったのは、大学一年の時読んだ『日本童謡集』（岩波文庫）の中でした。「大漁」という作品が一篇載っていたのです。

〈大漁〉

朝焼小焼だ
大漁だ
大羽鰮の大漁だ

浜は祭りのやうだけど
海のなかでは
何万の
鰮のとむらい
するだろう。

この作品を読んだ時、激しい衝撃を受けました。人間中心の目の位置をひっくり返される、深い、やさしい、鮮烈さでした。金子みすゞの作品をもっと読みたい。金子みすゞとはどんな人なのだろうか。

この日から、私のみすゞ捜しの旅は始まりました。そして16年後―昭和57年、実弟に辿りつき、みすゞが残した手書きの童謡集3冊があることが分かり、昭和59年、『金子みすゞ全集』（全512篇）を出版、以後、60篇の選集『わたしと小鳥とすずと』、『明るいほうへ』、童謡絵本『ほしとたんぽぽ』、評伝『金子みすゞの生涯』と、JULA出版局より次々と出版、60年をへてみすゞ甦りがおこなわれたのです。

みすゞ世界の広がり

この十年で、みすゞの出版物は50万部を越え、驚くような速さで広がっています。来年の小学校の国語4社にも「わたしと小鳥とすずと」や「ふしぎ」などが載り、日本中の小学生もみすゞに出会います。この広がりは、最近流行の“地球にやさしい”という人間中心の傲慢さとは対局にある、みすゞの作品の底に流れているものの見方、やさしさが、人々の心をとらえているからでしょう。

又、物質中心、人間中心の殺伐とした20世紀の中で、人々のこころが傷つき、疲れはて、ようやく新しい世紀にむけて、人としての本来の姿にもどりたい、とだれもが切実に思い始めたからでしょう。

なによりもうれしいのは、みすゞの童謡は三世代が共有できる、きわめてまれな文学世界だということです。幼児でも分かる童謡という文学形式の中で、人としての大切なことをたくさん気づかせてくれます。みすゞの作品は、読み手の人生観、宗教観、宇宙観、の深まりにつれて、どんなにも深く、楽しく読めます。

いのちということ

『大漁』を読むことで、今、最初の驚きから、こんなふうに考えることができるようになりました。

私たちの食卓にのぼる、魚も肉も、米も野菜も、みんな生きていたいのちです。そのいのちを食べることによって、私たちは生きているのではなくて、生かされているということ。つまり、私たちのいのちを生かすためには、他の弱いいのちを食べなければ生きられないということ。だからこそ、私たちをおつくりになった、宇宙、あるいはだれかさんは、変わってくれたいのちを悲しませないように、日々こころ豊かに生きなさいと教えてくれている、そんな気がします。　更に、いのち年ということも考えます。私は48才ですから、いのち年は40億48才です。みなさんも、いのち年は年令プラス40億年です。なぜなら、45億年前に地球ができ、40億年前に、地球にいのちが生まれ、そのいのちをずっと受け継いで、今、人としてこの世にいるからです。この40億年の間には、木だったことも、花だったことも、魚だったことも、鳥だったこともあるのです。

私はコスモスが大好きですが、それはきっと、以前、私はコスモスだったことがあるからでしう。好きだと思うのは、昔、その花だったからかもしれません。そう思うと、まわりの全てが、いとおしくなります。

見えぬけれどもある

〈積った雪〉

上の雪
さむかろな。
つめたい月がさしていて。

下の雪
重かろな。
何百人ものせていて。

中の雪
さみしかろな。
空も地面(じべた)もみえないで。

今まで私たちは、中の雪を見たことがあったでしょうか。中の雪の存在に立ち止まったことがあったでしょうか。私たちはいつも、目立つもの、目に見える世界ばかりを、見てきたのではないでしょうか。みすゞさんは「ほしとたんぽぽ」で“見えぬけれどもあるんだよ、／見えぬものでもあるんだよ”とうたっています。目に見えるものは、見えないとあぶないから見えるのです。机でもコップでも、車でも、みんな。しかし目に見えない、空気や人を愛するこころは、やさしいものだから、見えないのです。大切なものは、やさしいものだから目に見えない、そう気づく人でありたいものです

〈花のたましい〉

散ったお花のたましいは、
み佛さまの花ぞのに、
ひとつ残らずうまれるの。

だって、お花はやさしくて、
おてんとさまが呼ぶときに、
ぱっとひらいて、ほほえんで、
蝶々にあまい密をやり、
人にゃ匂いをみなくれて、

風がおいでとよぶときに、
やはりすなほについてゆき、

なきがらさへも、ままごとの
御飯になってくれるから。

このうたを読むと、完全に生きるということのすばらしさに気づきます。花はなんてやさしいのでしょう。なきがらさえも、ままごとの御飯になってくれるのです。

私たちは自分の最後の一瞬を、愛する人たちにかこまれて、この世を去りたいと思います。数日間のいのちなら、医師は痛みさえ取ってくれればいいのです。愛する家族と共に時間を過ごし、みんなに体をなでさすられたり、手をにぎられたりしながら、いのちを終わらせたいと願っています。それには、病院に、家族と最後を過ごせる部屋があるべきです。医師は治る病気を治す人であって、人のいのちの最後を、隔離する権利はないのです。医学は進歩しましたが、それだけいのちの尊厳を忘れてきたように思えます。大切ないのちです。

私たちが死ぬのは、愛する子孫と生存競争をしないためです。

みすゞさんで宇宙を語る宇宙物理学者佐治晴夫さんの言葉です。

※作品は『金子みすゞ全集』（JULA出版局）より、新漢字・新かなづかいに改めてあります

◆金子みすゞ童謡集『わたしと小鳥とすずと』『明るいほうへ』（矢崎節夫編）を10名様にさしあげます。ご希望の方は添付の葉書でお申し込み下さい。